

ドム語の「一」を表はす形式とその用法について

——同一性、唯一性、非現実性、個々別々性、不定性、特定性——

千田俊太郎

京都大学大学院・tida.syuntaro.3e@kyoto-u.ac.jp

キーワード：ドム語、パプア諸語、數量、非現実性、定不定

1 はじめに

ドム語はパプア・ニューギニアのシンプー州のグミネ地区及びシネシネ地区の一部で話される言語である¹。ドム語には「一」を表はす形式が複数ある。まづ、最も中性的に、「一」を表はす表現が(1)である。

(1) *ʌtenan*=「*ta*」 「一」

この形式は自立語 *ʌtenan* と接語=「*ta*」の二つの形式の組み合わせからなつてみると考へられる。この複合形式全體の特徴は、本論の最後に論じることとする。複合形式の要素になつてゐる二つの形式は、それぞれ他の環境にも現はれ、ある種の「一」を表はす。以下は名詞 *ʌpapal* 「女」を「一」が修飾する構文の例である。どれも形容詞と同様後ろから名詞を修飾する。

(2) *ʌpapal ʌtenan* 「たつた一人の女、同じ女、女だけ」

(3) a. *ʌpapal*=「*ta*」 「一人の女、ある女」

b. *ʌpapal* 「*ta*」 「一人の女、別の女」

本稿ではこれらの表現の形式と用法を扱ふ。本稿は「一」を表はす表現を特別に聞き出し調査した結果を示すものではなく、主にテキストに見られる表現から、各形式に特徴的と思はれるものを集めて整理したものである。「一」を表はす複数の形式に、どのような用法上の使ひ分けがあるのか、なかでも複合形式 *ʌtenan*=「*ta*」が何なのか、明らかにするために必要な言語事実と用法の確認手続きを示すことにする。

¹ ドム語には母音音素が五つ: /i, e, a, o, u/, 子音音素が十三個: /p, ^mb, m, t, ⁿd, n, k, ^ɠg, s, l, r, w, j/ ある。限られた環境で /a/ と /a:/ などの母音の長短の対立が見られる。閉鎖音は有聲前鼻音化子音と無聲非前鼻音化子音の二系列が區別される。本稿では長母音 /a:/ を *aa*、有聲前鼻音化子音 /^mb, ⁿd, ^ɠg/ を *b, d, g*、硬口蓋接近音 /j/ を *y* と表記する。超分節音素の語聲調: 高平 (Γ)、下降 (N)、上昇 (V) があり、語頭に記號を付して示す。サンディーが起きる場合に基底の語聲調の記號は丸括弧に入れる。發話において脱落してゐた母音を上付きで示す。

以下、§2 では同一・唯一・僅少の含みをもちうる $\Lambda tenan$ 「一つ」の用法、§3 では非現実を表はす Γta の用法、§4 では Γta の「個々別々」や「不定」を表はす用法、§5 では複合表現 $\Lambda tenan = \Gamma ta$ による用法を順に見る。§6 は結語である。

譯語は可讀性のために文脈に即した表現を時に使ふが、文レベルの譯ではドム語の表現に即して理解できるやうな直譯を括弧内に補つたり、その他のことばを補つたりした。

2 同一・唯一・僅少の「一つ」: $\Lambda tenan$

$\Lambda tenan$ は同一性、唯一性、僅少性の含みをもちうる「一つ」表現だと考へられる。自由變異に $\Lambda teran$ がある。

次の (4, 5) は $\Lambda tenan$ 「一つ」が「同じ一つ」と解釋されうる文脈に現はれる用法である。

(4) $\Gamma na \ \Lambda yopal \ \Lambda tenan.$

我 人 同一

私の一族である。

(5) $Vene \ \Lambda maket \ \Lambda i \ \Gamma ki \ \Lambda kor-e \ \Lambda daa \ \Lambda i \ \Gamma er^e \ \Lambda vim^e \ \Gamma p \ \Gamma yokau = \Gamma ta$ さて 市場 DEM 離-CONJ(SS) 坂 DEM DEST 下方. その 行.INF 少=INDEF

$Vgeu-gwa-l \ \Lambda im^e \ \Gamma p-re \ \Lambda kan \ \Gamma nule \ \Lambda er-pgi \ \Lambda nl$

曲-3SG.SRD-LOC 下方. あの 行-CONJ(SS) 見.INF 川 向-1PL.SRD.DEM 川

$\Gamma ta \ \Lambda vama \ \Lambda ya-gwi \ \Lambda kaa \ \Lambda i \ \Gamma Gurau/Wa = (\Gamma) Nul^e = (\Lambda) we$

一 亦 流-3SG.SRD.DEM 名.3SG.POSS DEM [河川名]=川=PF

$\Lambda Kopa \ \Gamma Klawa = (\Gamma) Nul^e = \Lambda we \ \Lambda nl \ \Lambda i \ \Lambda tenan \ \Lambda ya-m = (\Lambda) ba \ \Lambda kaa \ \Lambda i$

[河川名]=川=PF 川 DEM 同一 流-3SG=ADVRS 名.3SG.POSS DEM

$\Lambda vama \ \Lambda su \ \Lambda yo-pge.$

亦 二 稱-1PL.DEC

さて市場から坂を少し降りてゆき、下の少し曲がつたところに行つて、川側を向いて見ると、もう一つ川が流れてゐるのだけれど、その名前はグラウ・ワ川、コパ・クラワ川と、この川は一つなのだが、その名前はやはり二つ付いてゐる（我々は付けてゐる）。

複数の成員からなる單位がまとまりをなし「一つ」、「一體」であることを表現する際にも、 $\Lambda tenan$ がしばしば使はれる。次の (6) では複数の支族を抱へる氏族が本來は一つのまとまりであることを表現する中に、 $\Lambda tenan$ が現はれてゐる。

(6) $VKurpi \ \Lambda main \ \Lambda tenan = \Lambda iba \ \Lambda kore \ \Gamma i \ \Lambda vne \ \Lambda ne-m \ \Gamma ta \ \Lambda kul \ \Lambda yo-gwa$ [族名] 部族 一=ADVRS ADVRS DEM 自 父-3SG.POSS 別.SG 産.INF 慰-3SG.SRD

ʌklen ʌkepl=(ʌ)ta ʌkaa ʌyo-gwi ʌNuul=(ʌ)Gauma=(ʌ)we
 氏族 小=INDEF 名.3SG.POSS 命名-3SG.SRD.DEM [族名]=[支族標識]=PF
ʌdu-gwa ʌmol-gwa ʌO#ʌNul^e ʌel ʌil^e (ʌ)ke ʌpa-gwe.
 言-3SG.SRD 居-3SG.SRD [地名] 邊 水平.あの 建.INF 寐-3SG.DEC

クルピは一つの部族 (氏族) だが、他と異なる親の産んだ小さな氏族 (支族) にそれ自體固有の名を付けてヌール・ガウマといふのがゐて、あちらの地域のオー・ヌレに住んでゐる。

複数の物事が一體になる時、*ʌtenan* が「なる」を表はす構文 ʌu X ʌp- (來.INF X 行-) の X として使はれて「一つになる、一緒になる、仲良くなる」と表現することが頻繁にある。

- (7) *ʌkomuniti*=ʌla ʌi ʌmai ʌs-r^e ʌu ʌtenan ʌp ʌkomna ʌkepa
 コミュニティー=LOC DEM 集 (VN) LV-CONJ(SS) 來.INF 一 行.INF 野菜 薩摩芋
 ʌs ʌi ʌp ʌer^e ʌari ʌiki ʌyo-gwa-l ʌi=ʌwe ʌke ʌne-re
 採.INF 取.INF 行.INF 木 葉 家 有-3SG.SRD-LOC DEM=PF 蒸.INF 食-CONJ(SS)
ʌmol-igwa
 居-2/3PL.SRD

コミュニティーの中で集まつて一緒になつて種々の食料を収穫して持つて行つて、木の葉の家 (といふ儀禮的な建物) のあるところで料理して食べてゐて...

- (8) *ʌkura* ʌi ʌstop ʌe-pga ʌelmai ʌyu ʌmo-pn+(ʌ)a. ʌna ʌkol^e ʌkole ʌu
 戦 DEM 停止 する-1PL.SRD 今 只 居-1PL+EXPL 我 側 側 來.INF
ʌtenan ʌp-re ʌelmai ʌyu ʌmo-pn+(ʌ)a.
 一 行-CONJ(SS) 今 只 居-1PL+EXPL

戦争は停止して今は普通に暮らしてゐる。我々は雙方一つになつて (對立せずに) 普通に暮らしてゐる。

ʌtenan が唯一性 (「一つだけ」、「～だけ」の意味) を表はす場合もある。この場合、對比される對象が別途表現されることがよくある。次の例 (9, 10) では對比される對象が *ʌtau* 「その他」で表はされてゐる。

- (9) ʌgn ʌtau ʌkui ʌta ʌne+(ʌ)k-pg^e. ʌmekon ʌtenan ʌkui ʌno-pg^e.
 茸 別.NSG 生 IRR 食 +NEG-1PL.DEC メコン (茸名) 唯一 生 食-1PL.DEC

ほかの茸は生では食べない。メコンだけは生でも食べる。

- (10) $\Gamma ka/Vkopa$ $Vtau$ Λi $\Gamma para$ $\Gamma para$ $\Lambda no-pge.$ $\Lambda torkui$ $\Lambda tenan$ Γta
 鳥 別.NSG DEM 全 全 食-1PL.DEC トルクイ (鳥名) 唯一 IRR
 $\Gamma ne+(V)k-pg^e.$ $\Gamma ka/Vkopa$ $Vtau$ Λi Λgiu Γta $\Gamma e+V/k-gw^e.$ Λwai
 食 +NEG-1PL.DEC 鳥 別.NSG DEM 苦 (VN) IRR LV+NEG-3SG.DEC 良
 $Vpa-gwa$ Γs $\Lambda no-pn=\Lambda ba$ $\Lambda torkui$ $\Lambda tenan$ Λgiu
 性質である-3SG.SRD 打.INF 食-1PL=ADVRS トルクイ (鳥名) 唯一 苦 (VN)
 $\Lambda el-gwa$ Γta $\Gamma ne+(V)k-pg^e.$
 LV-3SG.SRD IRR 食 +NEG-1PL.DEC

ほかの鳥は全て食べられる。トルクイ*だけは食べない。ほかの鳥は匂ぐい味はしない。美味しいので射て食べるのだがトルクイだけは匂ぐくて (毒があつて) 食べない。
 (*ニューギニアには世界で稀な有毒の鳥が数種知られてゐる。トルクイはおそらく頭黒森百舌 ^{づぐもりもぎ} *Pitohui dichrous* のことを指すと思はれる。)

次の例 (11) でも「一度きり」で「次がない」ことを表現してゐる。

- (11) ‘ Λa $\Gamma kl^e=(\Gamma)d$ $\Gamma mol-o.$ $\Lambda giul$ $\Lambda elma$ Λek $\Lambda teran$ Λi $\Gamma yoko=(\Gamma)ta$ $gol-V/a-n=(\Lambda)wa.$
 ああ 静=ADV 居-IMP 痛 今 回 唯一 DEM 少=INDEF 感-FUT-2SG=CF
 Λkui Γta $\Gamma go+V/kl-a-n=(\Lambda)wa.$ $\Lambda du-gwe.$
 再 IRR 感 +NEG-FUT-2SG=CF 言-3SG.DEC

「ああもう、静かにしなさい。痛いのは今この一度きり、少し感じることはなる。次また痛くなるわけぢやないんだから」と (看護婦は) 言つた。

$\Lambda tenan$ に關聯し、形式と意味作用域のミスマッチが見られることがある。次の例 (12) を見られたい。

- (12) $Vkola$ Λi $\Lambda kor-a-pn=\Lambda ba$ $\Lambda no-pga$ Λwai
 コラの木 (*Ficus copiosa*) DEM 放棄-FUT-1PL=ADVRS 食-1PL.SRD 良
 $Vpa-gwa$ $\Lambda pl-e$ Vau Vgi $\Lambda du-pge.$ $Vkola$ $Vmne$
 性質である-3SG.SRD 思-CONJ(SS) 握.INF 緊 (VN) LV-1PL.DEC コラの木 嫩葉
 $\Lambda i=\Lambda ya$ $Vmle$ $\Lambda tenan$ $\Lambda no-pge.$ $Vwe-re$ $Viki$ Γta $Vke+(V)kl-a-pdae.$
 DEM=と 實 唯一 食-1PL.DEC 伐-CONJ(SS) 家 IRR 建 +NEG-FUT-1PL.SRD.MK
 Γura $\Lambda du-gwa$ Γere $Vyo-gwe.$ Γi $Vnene$ Γd Γp Λgil Λgol
 軟 (VN) LV-3SG.SRD 木 である-3SG.DEC DEM 自身 存在.INF 行.INF 乾 枯.INF
 $\Lambda kor-gwe.$ Λgil $\Lambda gol-gwa$ Γere Λi Vsu $gal-V/a-pdae.$ $Vkola$
 COMPL-3SG.DEC 乾 枯-3SG.SRD 木 DEM 收.INF 燃-FUT-1PL.DEC コラの木
 Γer^e Λi $\Lambda konan$ Γta Γta $Vpai+(V)k-gw^e.$ $\Lambda komna=\Gamma mere$ $\Lambda du-gwa$
 木 DEM 用 別.SG IRR 存在 +NEG-3SG.DEC 野菜=如 有-3SG.SRD

$\text{Vml}^e = (\Lambda)ya \text{Vmne } \Lambda no\text{-pge.}$

實=と 嫩葉 食-1PL.DEC

コラの木はやめたくても食べたなら美味しいので、そのために大事にしてゐる（しつかり握つてゐる）。コラの木は葉の新芽と實だけを食べるものだ。伐つて家を建てることはできない。軟らかい木なのだ。ひとりでに生えてゆき、枯れてゆき、それで終はりである（材木として伐られずに枯れ木になつて一生を終へる）。（コラの）枯れた木は柴刈りで集めて燃やす。コラの木には他の用途はない。野菜みたいなもので實と葉の新芽を食べる。

(12) では、二つの対象「葉の新芽」と「實」に對して $\Lambda tenan$ が後置され、「葉の新芽と實だけ」といふ構成素を作つてゐる。しかし、後の文脈も合はせられて觀察すると、「食用するだけ（で木材にするなど他の用途のない木）だ」と、この木の唯一の有用な特徴を表現するものである。このやうな意味作用域のミスマッチは、日本語などの取立詞にもしばしば見られる。 $\Lambda tenan$ が意味的に述部と關係をもつ際、専用の出現位置がないため、述部と近い關係をもつ部分に後續して現はれるのだと考へられる。

$\Lambda tenan$ の關與する唯一性の含み「他を措いてそればかり」が、「最も」に近づく場合がある。

(13) 文脈: 木麻黃の木は建築材料として大切であり、世にこの木がなければ家を建てることができずに困つてしまふことだらう。

$\Gamma na \text{Viki } \Gamma ama \Gamma ta \text{ (V)ke } \text{Vpai}+(\text{V)kl-a-pn}=(\Lambda)ba \quad \Lambda kolwa \Lambda du\text{-gwa} \quad \Gamma d\text{-re}$
我 家 亦 IRR 建.INF 寐 +NEG-FUT-1PL=ADVRS 木麻黃 有-3SG.SRD 有-CONJ(SS)

$\Gamma na \Lambda yal=\Gamma kan^e \text{Ni } (\text{V)au } \text{Vpl} \quad \Lambda du\text{-go} \quad \Lambda elma \text{Viki } (\text{V)ke}$
我 男=達 DEM 握.INF 助 (VN) LV-3SG.CONJ(DS) 今 家 建

$\text{Vpa-pgi}=(\Gamma)kene \quad \Lambda kolwa \Lambda elma \text{Vkepa } \Lambda yal \quad \Lambda no\text{-pga-l}=\Lambda ya$
寐-1PL.SRD.DEM=後 木麻黃 今 薩摩芋 植 (自給作物).INF 食-1PL.SRD-LOC=と

$\Lambda kopi \quad \Lambda kul \quad \Lambda no\text{-pga-l}=\Lambda ya \quad \Gamma i \quad kan\text{-Va-gi} \quad \Lambda kolwa$
コーヒー 植 (換金作物).INF 食-1PL.SRD-LOC=と DEM 見-FUT-2SG.SRD.DEM 木麻黃

$\text{Ni } \Lambda tenan \Lambda tenan=\Gamma d \Gamma d \quad \Gamma er^e \quad \Lambda na\text{-wdae} \quad \Lambda kolwa \Gamma ere \Lambda wai$
DEM 少 少=ADV 有.INF DEST 行.FUT-3SG.SRD.MK 木麻黃 木 良

$\text{Vyo-gwa} \quad \Lambda pl\text{-e} \quad (\Lambda)tenan \Lambda wone \text{(V)au } \text{Vgi} \quad \Lambda du\text{-pge.}$
有-3SG.SRD 感-CONJ(SS) 唯一 INTENS 握 緊 (VN) LV-1PL.DEC

(この木がなければ) 我々は家も建てて寐られないところだが、(実際には) 木麻黃があつて、我々を助けてくれて、今我々は家を建てて寐てをり、今、木麻黃は我々の所有する薩摩芋畑や我々の所有するコーヒー畑をあなたが見れば、木麻黃の木が少しづつずつと向ふまで生えてゐるはずだが、(それは) 木麻黃の木が良いものである (と考へる) ために我々が全くこればかり大切にしてゐる (きつく握つてゐる) からなのだ。

ここまで、*ʌtenan* 「一つ」が同一性や唯一性を表現する意圖と矛盾しない例を見た。*ʌtenan* が同一性や唯一性を「意味する」のかどうかは、ここでは態度を保留しておきたい。単一性を「意味する」言語表現が同一性や唯一性を表現する意圖の下に使用されてみると見ることもできさうだからである。

ʌtenan には僅少を表はす表現の中で使はれる用法もある。反復させて、分配的な意味で使ふ *ʌtenan ʌtenan* 「一つ一つ、一つづつ」は「少しづつ」の意味も持つし、*ʌsu ʌtenan* (二一) 「一二、一つ二つ」といふ慣用句は竝列された形式が小さな数の概数表現を形成するものである。これらは時に副詞化の=「d」を伴ふ。次の (14) は反復させて副詞化の=「d」を後置させた例、(15) は慣用句 *ʌsu ʌtenan* に副詞化の=「d」が付いた例である。

- (14) ʌta ʌi ʌmle ʌtenan ʌtenan=ʌd ʌkol-gw^e.
別.SG DEM 實 一 一=ADV 結-3SG.DEC

別の（種類の大葉赤榕の木）は實が少しづつしかつかない。

- (15) ʌyopal ʌsu ʌtenan=ʌd ʌmol-igwa
人 二 一=ADV 居-2/3PL.SRD
一人二人しかをらず...

(14, 15) において、*ʌtenan* は僅少を表はす複合的な表現に参加してゐる。これも、*ʌtenan* 自體が僅少を「意味する」といふべきではないかもしれない。ただ、「少しある」といふ含みではなく、「少ししかない」といふ含みで使はれることに注意すべきだと考へる。

ʌtenan は同じものであることを表現する文脈で使はれたり、「一つしかない」ことを取り立てて問題にする場合に使はれたり、「少ししかない」ことを表現する形式に参加したりするもので、中立的に「一」を表はさないやうなところがある。

3 非現実を示す用法

「一」の意味から最も遠いのが ʌta の非現実を示す用法である。しかし他の用法と區別する必要があり、また頻出する。これまでの例文にも何度も出て来てゐるので先に見ておくことにする。非現實用法の ʌta は、否定の接語 +ʌk(l)- (以下形態素の代表形を +ʌkl-と示す) のついた動詞とほぼ義務的に共起する。このやうな ʌta の基本的な出現位置は +ʌkl-のついた動詞の直前である。次に既出の例文を一つ再掲しておく。

- (16) ʌgn ʌtau ʌkui ʌta ʌne+(ʌ)k-pg^e. ʌmekon ʌtenan ʌkui ʌno-pg^e. =(9)
茸 別.NSG 生 IRR 食+NEG-1PL.DEC メコン (茸名) 唯一 生 食-1PL.DEC

ほかの茸は生では食べない。メコンだけは生でも食べる。

このように、否定の接語 +/kl-のついた動詞の直前に現はれる「*ta*」は +/kl-とともに複合的な否定表現を作るものである。上の文では、主語は一人称複数、目的語は二つ以上の葺であり、純粹な単一性の意味が關與する餘値はない。

否定文における「*ta*」の出現いかんと出現位置について、条件をもう少し正確に特定しておきたい (cf. Tida 2006: 133, 160–162)。まづ、年長者の發話において、稀に、否定文に「*ta*」が現はれないことがある。次の例では二語目の「あげる」の前に「*ta*」が現はれてゐない。

- (17) 「*en* 「*te+(V)kl-a-gi* 「*en* *lyopal* 「*en* *ld-na-m=lua*; *lgar-n* *lkai*
 汝 與 +NEG-FUT-2SG.DEM 汝 人 汝 言-FUT-3SG=CF 體-2SG.POSS 呪 (VN)
 ls-na-m=lua *ldu-gw^e*.
 LV-FUT-3SG=CF 言-3SG.DEC

お前が（人に柴を）あげなければ、人はお前のことを論ふ; 陰口をきく（「身を呪ふ」）と（昔の人は）言つた。

次に、否定命令文では、世代に拘はらず、このはたらきにおける「*ta*」は出現しない。自發的な發話に決して出現しないばかりでなく、聞き出し調査でも「*ta*」を付加すると容認されない。

- (18) 「*en* *nkunl ni* 「*ne+(V)kl-o* *ldu-gw^e*.
 汝 盜 DEM 食 +NEG-IMP 言-3SG.DEC

「盗みはするな」と言つた。

以上のことから、否定自體は +/kl-が表はしてゐると考へる。否定と共起する「*ta*」の用法は否定ではなく非現實と名付けておきたい理由の一つである。この用法が個々別々の「*ta*」と關はるとすれば、否定對極表現として「一つも～ない」といふ意味に由來する可能性がある。しかし、後述するやうに別の可能性もある。いづれにせよ、すでに述べたやうに、上のスタイル上の例外と構文的な例外を除けば、「*ta*」は共時的には否定文に義務的に現はれるものであるから、現在のドム語では「*ta*」は強い否定を表はすものではない。

出現位置についても例外をいくつか見ておきたい。動詞連用形が次の動詞と動詞連續を構成すると要素同士が固く結び付く。「*ta*」はその間に割り込まず、次のやうにその前に現はれる。

- (19) 「*ta* *lkul* *lye+(V)k-ike*.
 IRR 産.INF 慰 +NEG-1SG.DEC

産まなかつた。(産んであやさなかつた。)

目的語人稱・數標識も動詞の前に現はれることがあるが、最も普通の語順においては「*ta*」より動詞に近い位置に現はれる。つまり「*ta*」は次のやうに目的語人稱・數標識よりも前に現はれる。

- (20) λ gaman λ top Γ ta Γ ne Γ te+(λ)kl-gw^e.
 政府 俸 IRR 1NSG 與 +NEG-3SG.DEC

國は我々に給料をくれなかつた。

述語性名詞と輕動詞からなる述語では、(21) のやうに輕動詞の直前に Γ ta が置かれるのが普通だが、(22) の下線部のやうに述語性名詞の前に Γ ta が現はれることもある。

- (21) Γ ka λ kopa λ tau λ i λ giu Γ ta Γ e+ λ k-gw^e. = (10) の一部
 鳥 別.NSG DEM 苦 (VN) IRR LV+NEG-3SG.DEC

ほかの鳥はゑぐい味はしない。

- (22) λ i Γ ta Γ mo+ λ kl-a-gwa Γ en λ bola λ i Γ ta λ top Γ s
 DEM IRR 居 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝 豚 DEM IRR 買 (VN) LV.INF
 Γ ku+ λ kl-a-ga Γ en λ bola λ kal λ kan Γ ta λ ye+(λ)kl-a-gwa Γ en
 飼 +NEG-FUT-2SG.SRD 汝 豚 物 種 IRR 有 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝
 λ d-na-n Γ en λ kan Γ ml^e λ i λ er-go λ kamn λ kawa
 言-FUT-3SG.CONJ(DS) 汝 見.INF 上 DEM AUX-2SG.CONJ(DS) 天 雲
 λ ip^e λ d-na-m= λ ua λ du-gw^e.
 上方. あの 有-FUT-3SG=節末 言-3SG.DEC

これ (豚) がゐなければ、お前が豚を買つて飼はなければ、お前に豚や財産がなければ、(人は) お前のことを論ふが、お前が見上げてても空 (雲) がある (ばかりだ) と言つた。

その他、複合的な述語や有標な語順をもつ文において、 Γ ta の現はれる位置が不安定であつたり、二回出たりすることもある。次の例を見てみよう。

- (23) Γ ta Γ ba+ λ kl-e Γ nl^e=(λ)ya λ i Γ ta λ du λ er-e λ gal λ er-e
 IRR 削 +NEG-CONJ(SS) 液=と DEM IRR 絞.INF 除-CONJ(SS) 炙.INF 除-CONJ(SS)
 a. b. c. d.
 Γ ta Γ e+ λ kl-a-pgi λ yu λ ke λ ne- λ ra-pga λ aral
 IRR LV+NEG-FUT-1PL.SRD.DEM 只 蒸.INF 食-FUT-1PL.SRD 狂亂 (VN)
 e.
 λ kul- λ a-pdae
 LV-FUT-1PL.SRD.MK

(トプラム・カルといふ茸の皮を) 削らず、また (もし) 液などを搾り取つたり煮こぼしたりしない場合、そのまま調理して食べた場合、狂亂状態に陥る。

(23) には a. から e. の五つの動詞からなる複合的な述語が含まれる。『*ta*』は a. の前と e. の前の両方に現はれてゐる。なほ、a. と c. は連用形で、それぞれ次の動詞 b. と d. に連なつて固い動詞連続をなしてゐる。これらの動詞連続が構文 A-CONJ(SS) B-CONJ(SS) *e(l)*- (A-したり B-したりする) の A と B の要素としてはたらいてゐる。

次は有標な語順に關はり『*ta*』が二度現はれてゐると考へられる例である。

- (24) *Vene* \wedge *Bil* \uparrow *i*=(\uparrow)*rae* \wedge *yopal* \wedge *pl-gwi* \wedge *Bil* \wedge *win* \wedge *s-na-m*= \uparrow *d*
 さて [人名] DEM=MK 人 思-3SG.SRD.DEM [人名] 勝 (VN) LV-FUT-3SG=QUOT
 \wedge *pl-wdae* \wedge *kore*=(\wedge)*we* \wedge *membra*= \uparrow *rae* \wedge *win* \uparrow *ta* \wedge *Bil* \uparrow *ta*
 思-3SG.SRD.MK ADVRS=PF 議員=MK 勝 (VN) IRR [人名] IRR
 \uparrow *s*+(\downarrow)*kl-gwe*.
 LV+NEG-3SG.DEC

さて、ビルについては、人々が思ふに、ビルが勝つだらうと思つてゐたのだが、議員（議席）のことは勝ち取りはビルはしなかつた。

(24) では、無標な語順 \wedge *Bil* \wedge *membra* \wedge *win* \uparrow *s*- (ビル 議員 勝ち取り する-) であれば、否定文では述語性名詞の \wedge *win* と輕動詞の \uparrow *s*-との間に『*ta*』が一度現はれるだけだつたと考へられる。ここでの有標な語順 \wedge *membra* \wedge *win* \wedge *Bil* \uparrow *s*- (議員 勝ち取り ビル する-) では、述語性名詞の \wedge *win* の後ろと輕動詞の \uparrow *s*-の直前の二つの位置に『*ta*』が現はれてゐる。

4 個々別々・不定の「一つ」

この節ではまづ、§4.1 で『*ta*』、= \uparrow *ta*』の語聲調の振る舞ひについて觸れ、次に、『*ta*』、= \uparrow *ta*』の「非現實」以外の用法について紹介する。『*ta*』、= \uparrow *ta*』の用法は多岐に亙り、本稿で網羅することはできないが、大まかに個々別々 (§4.2)、不定 (§4.3) に分けて、特徴的な振る舞ひを見ながら、個々別々の用法と不定の用法の分類のための手續きについて考察する。

4.1 自立語・接語と語聲調

自立語『*ta*』は單獨で現はれるのに對し、接語= \uparrow *ta*』は必ず前の自立語に付いて現はれる。それだけではなく、二つは語聲調の實現様式に異なるところがある。ドム語の語聲調の振る舞ひ (cf. Tida 2006: 23-42) について、ここでは述べる。

ドム語では、一つの語に對して三つのピッチ・メロディー、高平 (\uparrow)、下降 (\wedge)、上昇 (\downarrow) が指定されてゐる。辨別的な語聲調システムがあるわけである。三つの語聲調のうち、上昇型の上がり具合には幅があり、音聲的にはあまりピッチの上昇が見られない時もあれば、語末がそれなりに高いピッチで實現する時もある。

- (25) a. \downarrow *kal* 「物」: [\downarrow ka \downarrow]~ [\downarrow ka \downarrow]~ [\downarrow ka \downarrow]
 b. \downarrow *kepa* 「薩摩芋」: [\downarrow ke \downarrow pa \downarrow]~ [\downarrow ke \downarrow pa \downarrow]~ [\downarrow ke \downarrow pa \downarrow]

c. *Vapal* 「女」: [a|pal-] ~ [a|pal+] ~ [a|pal]

ドム語には自立語の後ろにつく接語がいくつか存在する。接語にも独自の語聲調が指定されてゐる。ただし、接語の語聲調は、下降型語聲調の語に後続するといふ、特定の環境にしか現はれない。

- (26) a. *ʌka=ʌta* 「名=において」: [ka:ʌ ta]
- b. *ʌyal=ʌkope* 「男=たち」: [jaʌ koʌpe]
- c. *ʌbola=ʌmo* 「豚=か」: [ʌboʌla mo:ʌ]

下降型以外の語聲調をもつ語に後続すると、接語は自身の語聲調を失ふことが非常に多い。その場合、接語は前の語の語末より低いピッチで始まり、音節ごとにピッチがさらに低くなる、特有のメロディーで現はれる。このメロディーは接語の前の語が下降型の時にも見られなくはないが、稀である。

接語は複数連なることがあり、次の接語に移るたびにさらにピッチは低くなつてゆく。これまでのピッチの表示は語内の相対的なピッチのレベルと動きを表示するものだが、接語が始まるたびにキー・ピッチ自体が低くなる現象を表記する必要がある。キー・ピッチの低下を音聲表記では↓で表はすことにする。次は高平型の語に接語が後続する例である。

- (27) a. *ʌge=ʌkope* 「少女=たち」 [ʌge] ↓koʌpe+
- b. *ʌepi=ʌmere* 「火食鳥=のやうに」 [eʌpi] ↓meʌre+
- c. *ʌyopla=ʌta=ʌya* 「骨=のところ=と」 [yopʌla] ↓la] ↓ja:ʌ]

上昇型の語に接語が後続する場合、接語が自身の語聲調を失ふのは上と同様であるが、ホストの語のメロディーの上昇具合が必ず大きくなる。

- (28) a. *ʌkal=ʌta* (物=或) 「あるもの」: [kaʌ] ↓ta]
- b. *ʌkepa=ʌya* 「薩摩芋=と」: [keʌpa] ↓ja:ʌ]
- c. *ʌvapal=ʌkope* 「女」: [aʌpal] ↓koʌpe+

以上に見たことから、自立語 *ʌta* と接語 =*ʌta* を区別する目安になる形式的特徴は、次の二点である。

- (29) a. 自立語は單獨で現はれるのに對し、接語は必ず前の自立語に付いて現はれる。
- b. 自立語は常に独自の語聲調を實現させるのに對し、接語は高平形及び上昇型の語の後ろで独自の語聲調を失ふことが多い。

Tida (2006) では、接語 =*ʌta* が存在する可能性を検討してゐないが、自立語 *ʌta* と接語 =*ʌta* を区別すると用法の違いが見えてくる。

以下では接語に特有の、本來的でないメロディーが観察された場合、接語の本來の語彙的聲調を丸括弧でくくって表示する。次の (30) と (31) では、= \uparrow ta と \uparrow ta の違いは多くの場合音形の違いに反映され、= \uparrow ta の場合「ある」の意味・含みが、 \uparrow ta の場合「別の」の意味・含みが見られる。

(30) a. \downarrow apal=(\uparrow)ta 「一人の女、ある女」 cf. (3)
[a \downarrow pal \uparrow \downarrow ta \uparrow]

b. \downarrow apal \uparrow ta 「一人の女、別の女」
[a \downarrow pal \uparrow ta \uparrow]

(31) a. \uparrow ge=(\uparrow)ta 「一人の少女、ある少女」
[ge \uparrow \downarrow ta \uparrow]

b. \uparrow ge \uparrow ta 「一人の少女、別の少女」
[ge \uparrow (\uparrow)ta \uparrow]

(31b) では \uparrow ge と \uparrow ta の間で随意的にキー・ピッチが上がる。そのことを音聲表記では「(\uparrow)」で示した。一般に、高平型の語が連続する場合にキー・ピッチが上がる場合がある。

以上のやうに、接語は下降型以外の聲調をもつ自立語の後で頻繁に独自の語聲調を失ふが、この過程は随意的であり、稀に独自の聲調が保たれる場合がある。しかも、下降型聲調の自立語のあとに \uparrow ta、= \uparrow ta が生起する場合には、それが自立語なのか接語なのか、形式的な特徴によつては區別できない。このやうなことが、自立語 \uparrow ta 「一/別」と接語 = \uparrow ta 「一/或」との區別を困難にする要因になる。例へば、下降型の \downarrow yal 「男」に \uparrow ta が後続した場合は、ピッチの實現は必ず [ja \downarrow N ta \uparrow] であり、「一人の男」～「ある男」～「別の男」と譯せるやうな意味をもつ。ここで、上の (30) と (31) の振る舞ひとの平行性を假定すれば、次の (32) のやうに、= \uparrow ta 「一/或」と \uparrow ta 「一/別」といふ二つの形式があると言へるのではないか。

(32) a. \downarrow yal= \uparrow ta 「一人の男、ある男」
[ja \downarrow N ta \uparrow]

b. \downarrow yal \uparrow ta 「一人の男、別の男」
[ja \downarrow N ta \uparrow]

以上に見たやうに、= \uparrow ta と \uparrow ta はどちらも名詞に後続することができる点で、分布がよく似通つてゐる。ただし、= \uparrow ta も \uparrow ta も派生的な用法を多く持つてをり、必ず名詞に後続するわけではない。また、どちらの形式にも「一人の」と譯しても良ささうな場合があることが問題になる。しかし、自立語が \uparrow ta 「一/別」つまり個々別々、接語が = \uparrow ta 「一/或」つまり不定を表はす傾向があり、実際に、概ね分布上の棲み分けが見られるやうであるから、次にこれらの用法を精しく見てゆくことにする。

4.2 個々別々

自立語 Γta の用法の、最も基本的なものに、例へば、次のような例がある。

- (33) $Va\Gamma weke$ $Vkola\ Val^e\ \Gamma ta\ \Lambda du-gwe.$
 ア・ウェケ (*Ficus* sp.) コラ 兄弟 一個 有-3SG.DEC

ア・ウェケの木はコラの木の間の一つである。

(33) は、複数のもののうちの一項目を Γta が示してゐる。この例は比較的中立的に「一つ」であることを意味してゐるやうに見えるが、 Γta に特有の出現環境もありさうである。以下では、各項目が列挙される場合や Γta が「別個」の意味で用ゐられる場合などに分けて用例を見てゆく。結論を先に述べると、 $\Lambda tenan$ が「ほか全てと対立する一つ」を表現する側面があるのに対し、 Γta の用法は「ほかの個々と並ぶ一つ」、「個々別々」といふ含みをもつ表現群としてまとめられる。

4.2.1 対比的な項目

複数のもののうちのそれぞれを取り上げる場合、取り上げる個々の対象を Γta 「一つ」で指して表現することができる。ここでは複数のものが対比的に示される場合を見る。

- (34) 文脈: $\Lambda taip\ Vsuta\ \Lambda kol-gwe.$
 タイプ 三 生-3SG.DEC

(モルモルと呼ばれる茸には) 三種類ある。

- a. $\Gamma ta\ Ni\ \Lambda yu\ Vul^e$ $Vke\ \Lambda no-pge.$
 一 DEM 只 摘-CONJ(SS) 蒸.INF 食-1PL.DEC
一つはそのまま、もいだら火を通して食べる。
- b. $\Gamma ta\ Ni\ Vul^e$ $\Gamma kl\ Vpuul\ \Lambda kor-e$ $Vke\ \Lambda no-pge.$
 一 DEM 摘-CONJ(SS) 皮 剥.INF COMPL-CONJ(SS) 蒸.INF 食-1PL.DEC
一つはもいだら皮を完全に剥いて火を通して食べる。
- c. $\Gamma ta\ \Gamma ta\ \Gamma ne+(V)k-pge.$ $\Lambda giu\ \Lambda el-gwe.$
 一 IRR 食 +NEG-1PL.DEC 苦 (VN) LV-3SG.DEC
一つは食べない。ゑぐい (毒がある) のである。

上の用例とよく似てゐるのが、 $Vtau$ を使つた次のような表現である。

- (35) *ʋtau* *ʌte-gwe.* *ʋtau* *ʋta* *ʋte+(ʋ)kl-igwe.*
 いくつか 與-2/3PL.DEC いくつか IRR 與 +NEG-2/3PL.DEC

(候補者から投票を依頼されお金をもらつた人の中にはその候補者に票を) 投じる人も
いくらかある。投じない人もいくらかある。

列挙される項目が一つの場合に *ʋta*、二つ以上の場合に *ʋtau* を使ふ、数の對立があると考へてもよいのではないか。

ただし、上とよく似た表現で、*ʋtau* の代わりに *ʋta* が使へないわけではない。

- (36) *ʋta* *ʌpl-e* *ʌto-gwi* *ʋta* *ʌi* *ʋs* *ʌy-ugwi* *ʋi-re*
 或 聞-CONJ(SS) 與-3SG.SRD.DEM 或 DEM 勝.INF 得-3SG.SRD.DEM 得-CONJ(SS)
 a. b.

- ʌel-gwe.* *ʋta* *ʌi* *ʋta* *ʋe+ʋkl-igwe.*
 作-3SG.DEC 或 DEM IRR 作 +NEG-2/3PL.DEC
 c. d. e.

(有権者の) ある人が (政治演説を) 聞いて (票を) 投じてみると、(候補者の) ある人
 は (議席を) 勝ち得てから (公約を) 実行する。ある人は実行しない。(実行する人も実行しない人もある。)

ここでは、場合を二つに分けてそのうちの一つづつについて状況を説明する中で、*ʋta* (a., d.) が使はれてゐる。一つづつの状況は多くの事例にあてはまる。そして、a. の *ʋta* は動詞に現はれる主語人稱・數標識 (b., c.) が單數で對應してゐるが、次の d. の *ʋta* は複數標識 (e.) が對應してゐる。これは、ドム語の動詞の主語人稱・數標識が形式間の一致の原理に従ふものではなく、独自の意味表現であることと關係するやうに思はれる (cf. Tida 2006: 125, 219)。たしかに表現に首尾一貫してゐないところが認められるが、表現 *ʋta* が單數だと分析することを完全に阻むものではない。

ところで、ドム語の動詞に現はれる主語人稱・數標識においては、數が單 (1)・雙 (2)・複 (3 以上) の三項の鼎立が見られるのに對し、名詞に現はれる所有者人稱・數標識などにおいては 1 か 2 以上かの二項對立も見られる。「複數」といふ用語をルーズに使ふと無用の混亂を起こしかねないので、三項鼎立システムにおける 3 以上を複數と呼び、二項對立システムにおける 2 以上を非單數と呼ぶ (Tida 2006: 100)。この節で見た、對比的に列挙された個々の項目を取り上げる形式に、數對立を認める場合、單數 (*ʋta*)・非單數 (*ʋtau*) が對立することになる。

4.2.2 別個

ʋta には「別」であることを示すはたらきがある。すでに本稿で示した例文に該當する用例があるので、二つを再掲する。

- (37) *ʋkola ʔer^e ʌi ʌkonan ʔta ʔta ʋpai+(ʋ)k-gw^e.* = (12) 中の一文
 コラの木 木 DEM 用 別.SG IRR 存在 +NEG-3SG.DEC

コラの木には他の用途はない。

- (38) *ʔta ʌi ʋmle ʌtenan ʌtenan=ʔd ʌkol-gw^e.* = (14)
 別.SG DEM 實 一 一=ADV 結-3SG.DEC

別の (種類の大葉赤榕の木) は實が少しづつしかつかない。

ʔta 「別」には、補助動詞 *ʌer-* と組み合はせる用例が一定数ある。この補助動詞は文に場所、属性表現などを持ち込み移動、変化、状態などを表す。次の例は、「票を投じる」先である場所が「別」であることを補助動詞とともに表現してゐる。

- (39) *ʋtau ʌyu ʔne-re ʌaik=ʔla ʌkui ʔte ʔba ʔta ʌer-e*
 いくつか 只 食-CONJ(SS) 好=LOC 新 與.INF 場 別.SG AUX-CONJ(SS)
ʌel-igwe.
 作-2/3PL.DEC

(投票を依頼されてもらった金を恩に報いず) ただ使つて、好き勝手に今度は (票を)
別のところ (候補者) に投じたりする人もいくらかゐる。

(40) のように、補助動詞 *ʌer-* と組み合はせて「異なる、別である、變はる」の意味を表はすことも多い。

- (40) *ʌelmagia ʔna ʌmol ʌu-pga-l ʌi ʌkui ʋpai ʔta ʌer-gwa*
 近頃 我 居.INF 來-1PL.SRD-LOC DEM また 性質である.INF 別.SG AUX-3SG.SRD

(親の世代の暮らし方と比べると) 近頃我々が暮らしてゐるところはまた異なるため...

この際、單獨で、あるいは補助動詞とともに反復表現を形成して「別々、様々、千變萬化」を表現することも見られる。(41, 42) はそのような例である。

- (41) *ʌgar-i ʌkol ʔta ʔta ʌer-gwe.*
 色-3SG.POSS 持.INF 別.SG 別.SG AUX-3SG.DEC

色がそれぞれ異なる。(色を持つこと別々である。)

- (42) *ʔmukal^e ʔba ʋber ʋye-re ʔkle=(ʔ)d ʔi ʔp*
 竹 長いものの部分 穿.INF RES-CONJ(SS) 静=ADV 持.INF 行.INF
ʌgla=ʔla ʋpaal ʋpu ʌdu-gwa ʔbe ʔd ʔta
 口.3SG.POSS=LOC 附.INF 吹 (VN) LV-3SG.SRD 鳴 (VN) LV.INF 別.SG
ʌer-e ʔta ʌer-e ʔta ʌer-e ʌel-gwi
 AUX-CONJ(SS) 別.SG AUX-CONJ(SS) 別.SG AUX-CONJ(SS) LV-3SG.SRD.DEM

(適当な長さに切つた) 竹のなかほどに孔を開けておき、そつと持つていつて、口に當てて吹くと様々な音が鳴る (音が鳴ること 別 になり また別 になり また別 になる) のが...

「別」を表はす用法においても、単數で *ʔta*、非單數で *ʋtau* と表現する、數の對立があるやうに思はれる。非單數の *ʋtau* 「別」の例はすでに擧げたものでは (9, 10) に見られるが、次に二つの例文を加へておく。

- (43) *ʌdoon ʌel ʔer^e ʌkomn^e ʌo-gwe. ʔgn ʋtau ʌdoon ʋyel ʔta*
 美味 (VN) LV.INF DEST 最初 行-3SG.DEC 茸 別.NSG 美味 (VN) 如是 IRR
ʔe+ʋk-gw^e.
 LV+NEG-3SG.DEC

(この茸が) 最も美味しい (この茸が美味しいことはトップに行く)。他の茸はこれほど美味しくない。

- (44) *ʋke-pgi ʔde ʌkunal ʔta ʔs+(ʋ)k-gwe. ʔgn ʋtau*
 蒸-1PL.SRD.DEM 火が通る.INF とろける (VN) IRR LV+NEG-3SG.DEC 茸 別.NSG
ʔde ʌkunal ʌsu-gwe.
 火が通る.INF とろける (VN) LV-3SG.DEC

(この茸は) 煮ても煮崩れしない。ほかの茸は煮崩れする。

非單數の *ʋtau* 「別」と、*ʔpara* 「全て、皆」が共起する例も多い。

- (45) *ʔgn ʋtau ʔpara ʌwon^e ʔkepl ʌkol-gwa ʔkamʌtai ʔgn ʋtau ʌpor ʌkol-gw^e.*
 茸 別.NSG 全 INTENS 小 生-3SG.SRD 落雷 茸 稍 巨 生-3SG.DEC
 ほかの茸は みな 小 さくて、(小さい茸の中では) 雷茸がやや大きい。

以上のやうに、非單數の *ʋtau* 「別」の用例は、「特定のもの (典型的には一つ) を除いたほかの全て」を表はすものばかりだといふ點が特徴的である。文脈を追ふと、焦點になる情報は (43) では「美味しい茸」、(44) では「煮崩れしない茸」、(45) では「雷茸」の話であり、それとの對比で *ʋtau* 「その他 (全て)」が持ち出されてゐる。また、非單數の *ʋtau* 「別」は、單數の *ʔta*

「別」と違ひ、補助動詞 *ler-* と組み合はせる用例は見られないし、反復されて「別々、様々」のやうな意味を表はすこともない。

4.2.3 累加される項目

各項目に *Γta* が付いた列挙表現でも、§4.2.1 で見たやうに複数のものを對比的に示すのではなく、同様のものを累加的に列挙する場合がある。この時、表現の含みは數へ上げに近くなる。實際に *Γta*, *Γta*, *Γta...* と數へることがある。二つ目以降の提示では、「もう一つ」の「もう」の表はすやうな、追加の含みをもつと言ふべきかもしれない。次の例を見よう。

- (46) (*Λ*)*blΛmala* *Λbo-ka* (*Λ*)*nmΛbona* *Λdo-gwe.* *Γta* *Λbo-ki.* *Γta*
 棒 刺さる-1SG.SRD 傷 (VN) LV-3SG.DEC 一 刺さる-1SG.SRD.DEM 一
Λbo-ki. ...
 刺さる-1SG.SRD.DEM

棒が(足に)刺さつて傷ができた。ほら一つはここに刺さつた。ほら(もう) 一つはここに刺さつた。

- (47) *Γka* *Λkipi* *Γd-re* *Λkenedeit* *Γta* *Λmol-gwa* *Γp* *Γta* *Λmol-gwa* *Γp*
 語 嘘 言-CONJ(SS) 候補 一 居-3SG.SRD 行.INF 更なる一 居-3SG.SRD 行.INF
Γta *Λmol-gwa* *Γp* *Λmoni* *Λkunai* *Λgur* *Γne-re* (*Λ*)*paul* *Λpaul*
 更なる一 居-3SG.SRD 行.INF 錢 など 引.INF 食-CONJ(SS) 不貞 不貞
Λel *Λwan-e* *Γka* *Λkipi* *Γmuru* *Γd* *Λwan-igwe.*
 作.INF 巡-CONJ(SS) 語 嘘 ばかり 言.INF 巡-2/3PL.DEC

(酒食金品を受け取らうとして、投票を約束すると)嘘については、一人の候補者のところに行き、また別の候補者のところに行き、また別の候補者のところに行き、お金を奪つて使ひ、裏切りを重ねて廻り、嘘ばかりついて廻る。

- (48) *Γna* *Γna* *Λto.* *Γna* *Γna* *Λto.* *Λyal* *Γta* (*Λ*)*i* *Γki=(Λ)we.* *Λyal* *Γta* (*Λ*)*i* *Γki=(Λ)we.*
 我 我 與.IMP 我 我 與.IMP 男 一 DEM 悪=PF 男 一 DEM 悪=PF
Γna *Γna* *Λto.* *Λwai=Λwe* *Γd-re...*
 我 我 與.IMP 善=PF 言-CONJ(SS)

私に(票を)くれ。私に(票を)くれ。一人目のこの男は悪いやつだ。次のこの男も悪いやつだ。私に(票を)くれ。私は良い(男だ)と言つて...

以上のやうな、同様のものを列挙する用法は、複数の *Γtau* 「いくつか」には見られないやうである。

Γta が追加の含みをもつ場合、*Λama* 「～も亦、もう～」と共起することも多い。

- (49) $\Gamma kom \wedge bl \quad \wedge i \quad \wedge kar \quad \wedge i \quad \Gamma ta \quad \wedge u-gwa \quad \Gamma ta \quad \wedge vama \quad \wedge u-gwa \quad \Gamma ta \quad \wedge vama$
 道 DEM 車 DEM 一 来-3SG.SRD 更なる一 亦 来-3SG.SRD 更なる一 亦
 $\wedge vama \quad \wedge u-gwa \quad \wedge mel \quad \Gamma ki \quad \wedge wan-igwe.$
 亦 来-3SG.SRD 多 INTENS 巡-2/3PL.DEC

この道に車つてのが一つ来て、また一つ来て、またもう一つ来て（といふ具合にどんどん来て）、たくさん通った。

複数の $\wedge tau$ 「いくつか」も $\wedge vama$ と共起し、 $\wedge tau \wedge vama$ 「もういくつか、もう少し」の表現が全く問題なくできる。ただし、 $\wedge vama$ なしでは「もう～」の含みは出ない。

4.2.4 その他

Γta は異常、非常、特別、格別などを表はす強調語としても働く。これは「別個」の意味の特別な場合と言へるかもしれない。次の (50a) は補助動詞 $\wedge er-$ が Γta を導入して特別に大きい程度を表はす例である。 Γta による強調がない表現 (50b) を参考のため添へる。

- (50) a. $\wedge knan \quad \wedge gol \quad \Gamma ta \quad \wedge er-ke.$
 飢 感.INF 非常 AUX-1SG.DEC
 腹が非常に減った（腹の減ることが甚だしかった）。
 b. $\wedge knan \quad \wedge go-ke.$
 飢 感-1SG.DEC
 腹が減った。

長く、複数の話にまたがる談話の中で、話題のまとまった一つの話の単位を Γta で指すこともある。例へば、千田 (2019) に見える訓話の思ひ出し語りでは、初めに「盗むな」、「人に疑はれるやうな行爲をするな」といふ教への内容について一通り (千田 2019: (6-31)) 話したあと、次のやうに締め括つてゐる。

- (51) $\Gamma ta \quad \wedge yel \quad \Gamma du-gw^e.$
 一 如是 言-3SG.DEC
 一つはさういふことを言つた。

そして、直後に次の話題に移る際には次のやうに切り出してゐる。

- (52) $\Gamma ta, \quad \wedge al-n \quad \wedge komn^e \quad \wedge vik^e \quad (\wedge V)ke \quad pai-\wedge na-gwa \quad \wedge ai$
 他 兄弟-2SG.POSS 初 家 建.INF 泊-FUT-3SG.SRD 所
 ほかには (第二に)、お前の兄さんの住む家に...

「*ta*「一」が複合語の要素になつてゐる場合が少なくとも一つある。*vsu*「二」と「*ta*「一」からなることが明らかな、*vsuta*「三」といふ表現である。同じ「二」と「一」からなる *vsu* *ntenan*「一二、一つ二つ」が僅少概数表現を形成するのに對し、*vsu*「二」に對し「*ta*「もう一つ」が加算されると「三」になるわけである。*ntenan* と「*ta*の違ひはこのやうなところにも反映されるやうに見える。

4.3 不定用法

4.3.1 純粹な不定

トーンの振る舞ひから接語だと言へる=*ta* は基本的に不定を表はすやうである。まづ、談話に初めて導入される対象などにつく。次は、=*ta* が特定の、しかし不定の対象についてゐる例である。

(53) 文脈: 昔話の語り出し

lyal *ʋapal* *ʌmapn* *ʋsu*=(*ʔ*)*ta* *ʋme-pka*=(*ʌ*)*we*,
男 女 老 二=INDEF 居-2/3DU.SRD=PF

お爺さんとお婆さんの (ある) 二人がみたのですが、

この例では、二人の対象に對し=*ta* がついてゐる點も個々別々の「*ta*と異なる。なほ、この例に現はれる *vsu*=(*ʔ*)*ta*「ある二つ」は音聲的には [ʃu:ʌ ↓ta]、*vsuta*「三」は音聲的には [ʃu:ʌta] であり、ピッチの實現様式の違ひは大きい。

次に、対象が不特定である場合にも=*ta* がつくものがある。

(54) *ʌpran* *ʋpa-gwa* *lyal* *mol-ʋa-gwa-l* *ʌna-gi*
氣前良い (VN) LV-3SG.SRD 男 居-FUT-3SG.SRD-LOC 行.FUT-2SG.SRD.DEM
ʋkal=(*ʔ*)*ta* *ʔne* *mol-ʋa-gwa* *ʌna-dae* *ʌorpl*=*ʔd* *ʔen*
物=INDEF 食.INF 居-FUT-3SG.SRD 行.FUT-2SG.SRD.MK 急=ADV 汝
ʌte-na-wdae.
與-FUT-3SG.SRD.MK

氣前の良い男のところに行く場合、(その人が) なにか物を食べてゐる時に行つても、すぐにお前に分けてくれる。

下降型の語の後に來てゐる場合は、聲調の上では自立語か接語か確かめられないが、次のやうなものは、意味的な特徴から上の接語と同じものと見るのが良いやうに思はれる。

(55) *ʌba* *ʋKaupa* *ʔeku* *ʌu-gwa* *ʌkui* *lyal* *ʌdraiwa*=*ʔta* *ʌGelwa*=*ʌwe* *ʌdu-pga*
しかし [人名] 後 來-3SG.SRD 今度は 男 運轉手=INDEF [人名]=PF 言-1PL.SRD

λ amblans λ kar ν au-re ν wan-gwa λ yal= Γ rae, λ Nera Γ Gaima λ amblans λ kar
 救急車 車 運轉-CONJ(SS) 巡-3SG.SRD 男=MK [地名] 救急車 車
 ν au-gwa λ yal= Γ rae λ u-gwa ν ama λ s-igwe.
 運轉-3SG.SRD 男=MK 來-3SG.SRD 亦 打-2/3PL.DEC

しかし、カウパは後から来てみたのだが（その前に）、今度はある男の運轉手、ゲルワといふ名前で救急車を運轉して廻るあの男が、ネラ・ガイマ（地区）の救急車を運轉するあの男が来たところを、やはり（暴漢たちが）襲った。

(56) λ taim= Γ ta ν na-pl+(Γ)a.
 時=INDEF 行.FUT-1DU+EXPL

そのうちいつか（或る時點で）二人で行かう。

(55) は初めて導入される人物に、(56) は特定されない時間に= Γ ta がついてゐる。

= λ mo 「～か（選擇）」、= Γ mere 「～のやうに、～程」、 ν yel 「このやうに、この程度」のやうな例示や選言の表現の最後に= Γ ta を用ゐる場合がある (Tida 2006: 230)。「そのうちの一つ」、「そのやうなもの一つ」と譯せる場合もあるので、個々別々の Γ ta の用法にも類似した意味を表はしてゐるとも取れる。しかし、例示や選言と組み合わせる用法を見ると、これは自立語 Γ ta ではなく、全てが接語= Γ ta といへるやうである。また、日本語で「一つ」と譯せない場合も多く見つかる。そもそも數へられる對象でないものに= Γ ta が付いてゐる場合もある。以下では、日本語に譯すことがほとんど無理な場合も含め、假の譯語を全てつけて表現のどのあたりに= Γ ta があるのか示すことにする。

次の (57) の例は最初の文 (57a) の二つの= Γ ta に接語特有の独自の語聲調を失つて低くなるメロディーが觀察されるが、續く文 (57b) に現はれた= Γ ta は独自の聲調を保つてゐる。しかし、非常に似た表現の中に現はれるので、同じものと見るべきであらう。

(57) a. λ kot (λ)tri λ ias= λ mo ν yel=(Γ)mere= Γ ta (λ)po λ ias= Γ mer^e ν yel=(Γ)ta
 裁判 三 年=か 如是=程度=INDEF 四 年=程度 如是=INDEF
 λ d-ipke.
 LV-2/3DU.DEC

(二人は) 裁判を三年かそんなぐらゐ(ばかり)、四年ほどそこら、した。

b. λ d-ipka (λ)wan λ ia= Γ mere=(λ)mo ν yel= Γ ta ν pa-gwa λ Nik ν Kuman
 LV-2/3DU.SRD 一 年=程度=か 如是=INDEF 有-3SG.SRD [人名] [人名]
 Γ para λ membra λ win λ su-m= λ ua λ du-gwa λ Nik ν Kuman λ mol-gwe.
 充分 議員 勝 (VN) LV-3SG=CF 言-3SG.SRD [人名] [人名] 居-3SG.DEC

そして一年ほどか、そのくらゐ(ばかり)して、ニク・クマンが（選挙に）勝つたものとしてよろしいと（判決に）言ふので、（議員は）ニク・クマンになつた。

次の (58-60) は下降型の語のあとに=「*ta* が現はれ、基底の語聲調が保たれてゐるが、みな、類例であるから、接語の=「*ta* だと考へる。

- (58) $\lambda al = \lambda mo$ $\lambda bola = \lambda mo$ 「*ka*/*kopa*=(λ)*mo* 「*ka* λkan =「*ta* $\lambda u-gwi$
 犬=か 豚=か 鳥=か いろいろなもの=INDEF 来-3SG.SRD.DEM
 犬か豚か鳥かいろいろなもののどれかが来た時...

- (59) (λ)*wan* $\lambda ia = \lambda mo$ (λ)*tu* $\lambda ia =$ 「*ta* $\lambda pa-gwa$ λikn λi λkui λNik $\lambda Kuman$ $\lambda memba$
 一 年=か 二 年=INDEF 有-3SG.SRD 時 DEM 再 [人名] [人名] 議員
 $\lambda mol-gw^e$.
 居-3SG.DEC
 一年か二年かそこら経つてから再びニク・クマンが議員になつた。

- (60) $\lambda vene$ λapl λile $\lambda Suwawe$ 「*Wera* $\lambda Mori = \lambda mo$ λyel $\lambda du-gwa =$ 「*ta* $\lambda mol-m$
 さて 奥 水平. あの [地名] [人名] [人名]=か 如是 言-3SG.SRD=INDEF 居-3SG
 $\lambda du-gwe$.
 言-3SG.DEC
 さて、向ふの奥のスワウエにウエラ・モリとかそんな風にいふの (人) がゐるのださうだ。

次の (61) では、二つ目の=「*ta* はこれまでに見たものと同様、=「*mere* 「～のやうな」と共起してをり、また接語特有のメロディーで現はれてゐる。一つ目の=「*ta* は例示や選言の文脈にはなく、接語特有のピッチが現はれる環境にないが、明らかにそれと平行する表現である。

- (61) 「*na* 「*el* λi $\lambda mo-ka$ $\lambda kore = (\lambda)we$ $\lambda oo-na$ $\lambda gaal^e = (\Gamma)la$ $\lambda i = \Gamma ra = (\lambda)we$
 我 附近 DEM 居-1SG.SRD ADVRS=PF 手-1SG.POSS 仔=LOC DEM=MK=PF
 $\lambda doon =$ 「*ta* $\lambda el-gwa$ $\lambda oo-na$ $\lambda gaal^e$ $\lambda sula = (\Gamma)la$ λi
 痒 (VN)=INDEF LV-3SG.SRD 手-1SG.POSS 仔 掌=LOC DEM
 $\lambda doon = \Gamma mere = (\Gamma)ta$ $\lambda el-gwa$
 痒 (VN)=如=INDEF LV-3SG.SRD

私がここにゐた時だが、この手の小指がだな、なにか痒くて、この手の小指の掌側がなにか痒いやうだつたので...

以上のやうに、不定の=「*ta* を同定する手続きとして、形式面の特徴を押しへた上で平行する出現環境を辿ることを認めれば、用法の擴がりを確認することができよう。英語に譯すと *some*,

someone, sometime, somewhat のような意味領域を中心に使はれてゐる點で、接語= Γta の機能のラベルとしては不定を選んでも問題なささうである。

しかし、不定を表はすやうに見えるもののなかには、自立語に附着してゐない Γta がある。次の例では Γta 文頭にあり、先行する自立語に附着してゐない。

- (62) ∇dam^e λgua λgua Γta $\Gamma ko + \nabla k-gwe.$ Γta
 ニューギニア・オーク 出鱈目 出鱈目 IRR 生 +NEG-3SG.DEC INDEF
 $\lambda kol-gwa-l$ λai $\lambda kol-gwe.$
 生-3SG.SRD-LOC 所 生-3SG.DEC

(ダラダラといふ茸は) ニューギニア・オーク*に出鱈目に生えるものではない。
どこか/ある、生えるやうな場所に生えるのだ。

(*ニューギニア・オークとは *Castanopsis acuminatissima* のことである。)

不定を表はす自立語の Γta が存在し、直前に別の自立語があれば接語化して= Γta で現はれるものだと考へておきたい。

接語的な振る舞ひを示すものの中には、次のやうなものが含まれる。

- (63) $\nabla gaal$ ∇su λkul $\nabla yo-gwi$ $\Gamma wa-m=(\Gamma)ta$ λkul $\nabla ye-re$
 兒 二 産.INF 慰-3SG.SRD.DEM 息子-3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS)
 $\lambda apl=(\Gamma)ta$ λkul $\nabla ye-re$ $\lambda el-m$ $\lambda du-gwe.$
 女兒.3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS) LV-3SG 言-3SG.DEC

子供を二人産んだが、一人(目)は息子を産み、(もう)一人は娘を産んだと言ふ。

(63) の例は、用法としては複数のうちの各項目になる「個々別々」と似てをり、判別が難しい。強ひて言へば、(63) の= Γta は對比的あるいは累加的な強い含みを持たず、比較的中立的な列挙表現を構成してゐる。

4.3.2 可能性提示

明らかに接語の振る舞ひを示す= Γta が現はれる表現の中には、次のやうな例がある。

- (64) Γila λwau $ye-\nabla na-n=(\Gamma)kene$ Γen $\Gamma er^e=(\Gamma)ta$ ∇su λop λel
 内 空 (VN) LV-FUT-3SG.CONJ(DS)=後 (DS) 汝 柴=INDEF 刈.INF 把手 作.INF
 ∇kn $\lambda i-na-dae$ ∇kn Γyu $\lambda mena$ λi
 肩にかける.INF 取-FUT-2SG.SRD.MK 肩にかける.INF 持つて来る.INF 外 DEM
 λer $\lambda kor^e=\nabla pare$ Γen Γere λyal ∇vik^e $\lambda p-o$ $\lambda du-gw^e.$
 移.INF COMPL-CONJ(SS)=後 (SS) 汝 DEST 男 家 行-IMP 言-3SG.DEC

家が留守の時に、お前が柴刈をして(括つて)把つ手をつけて肩にかけて行く場合は、肩にかけて運んで來たら(その家の)外に下ろしてしまつてお前は男の家に歸れと言つた。

上の例では文脈からも、柴は當然一本ではありえない。形式的にも内容的にも個々別々の用法でないことは確かである。そして、これまでの議論から、形式的には不定が想定される。ただ、不定であることを示す表現意圖が明確ではない。

このように、「一つ」の意味が表現されてをらず、条件節の中にしばしば出現する接語=*ɽta* が存在する。このやうなものを、なんらかの「場合」を假定する節に特有に現はれるものと見ることができるかもしれない。ここではそのことを可能性提示と呼ぶ。

次の例 (65) では=*ɽta* が一匹を示してゐるとしても、論理的には矛盾はない。ただ、「一匹飼ふなら一匹飼へ」と表現してゐるとするのは不自然である。

- (65) *ɽbola* *ɽtop* *ɽs-na-gi* *ɽbola* *ɽi* *ɽapal* *ɽbola* *ɽi* *ɽsu* *ɽtop* *ɽs-o*
 豚 買 (VN) LV-FUT-2SG.DEM 豚 DEM 女 豚 DEM 二 買 (VN) LV-IMP
ɽdu-gw^e. *ɽyal* *ɽbola=ɽta* *kul-ɽa-gi* *ɽtenan=ɽta* *ɽkul-o* *ɽdu-gw^e*.
 言-3SG.DEC 男 豚=INDEF 飼-FUT-2SG-DEM 一=INDEF 飼-IMP 言-3SG.DEC

豚を買ふときには、豚は雌豚なら二匹買へと言つた。雄豚を (一匹?) 飼ふなら一匹 (だけ) 飼へと言つた。

(65) では=*ɽta* は下降型の語に後續してをり、ピッチの實現様式から接語かどうかを決めることもできない。しかし、不定の一種であり、なかでも可能性提示の類例だとすれば理解できる。

可能性提示の用法でも、接語だけではなく、自立語 *ɽta* があるやうである。次の (66) は茸が一個であることを表現してゐるものと見ても矛盾はないが、一個であることを表現する必要はなく、上と同様のものである可能性がある。

- (66) *ɽta* *ɽul-e* *ɽau* *ɽbeke* *ɽd-na-wdae* *ɽkama* *ɽorpl=ɽd*
 INDEF 摘-CONJ(SS) 握-INF 折 (VN) LV-FUT-3SG.SRD.MK 黒 (VN) 急=ADV
ɽs-na-wdae.
 LV-FUT-3SG.SRD.MK

もし (トプラム・カルといふ茸を) もいで、手で折つた場合、すぐに黒くなる。

以上のやうに、不定の一種として、可能性提示の=*ɽta*、*ɽta* が存在するやうに思はれる。しかし、可能性提示の=*ɽta*、*ɽta* としたのは便宜的な解釋で、まだはつきりした認定基準はないので積極的に認めてゆくことはできない。次の (67) を見てみよう。

- (67) *ɽta* *ɽna* *kar-ɽa-l=(ɽ)d* *ɽu-na-ga* *ɽna* *ɽDom* *ɽkamn* *ɽmol=ɽua*.
 INDEF 我 見-FUT-1SG=QUOT 來-FUT-2SG.SRD 我 ドム 界 居.1SG=CF

(あなたが) もし私に逢ひに來たければ、私はドム地域にゐる。

(67) は個々別々の用法として「あなたたちのうち一人」あるいは不定の用法として「あなたたちのうち誰か」と解釋もできる。もう一つの可能性として、「ある場合」を示す節に可能性提示

の「*ta*」が現はれてみると見ることもできるかもしれない。しかし、解釋の可能性ばかり増えて判断は定まらない。

すでに見た次の例の下線部は、否定との組み合わせで「*ta*」が出てきてゐるものと考えた。

- (68) *ni ta mo+Vkl-a-gwa en Nbola ni ta Vtop s*
 DEM IRR 居 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝 豚 DEM IRR 買 (VN) LV.INF
ku+Vkl-a-ga en Nbola Vkal Nkan ta Vye+(V)kl-a-gwa en
 飼 +NEG-FUT-2SG.SRD 汝 豚 物 種 IRR 有 +NEG-FUT-3SG.SRD 汝
nd-na-n en Vkan ml^e ni ler-go vkamn kawa
 言-FUT-3SG.CONJ(DS) 汝 見.INF 上 DEM 移-2SG.CONJ(DS) 天 雲
lip^e nd-na-m=lua ndu-gw^e. = (22)
 上方. あの 有-FUT-3SG=節末 言-3SG.DEC

これ（豚）がなければ、お前が豚を買って飼はなければ、お前に豚や他の財産がなければ、（人は）お前のことを論ぶが、お前が見上げてても空（雲）がある（ばかりだ）と言った。

可能性提示の「*ta*」を積極的に認めるとすれば、(68)において、否定との組み合わせの「*ta*」が存在せず、可能性提示の「*ta*」が出てきてゐるといふ解釋も検討しなければいけなくなる。

また、これもすでに見た次の例の場合、複合述語に對して、「*ta*」が二回出てきてゐる。複合述語の否定だから二回出てきてゐるのか、「*ta*」の一つが可能性提示としてはたらいてゐるのか、判断ができない。

- (69) *ta bba+Vkl-e n^e=(λ)ya ni ta Vdu ler-e gal ler-e*
 IRR 削 +NEG-CONJ(SS) 液=と DEM IRR 絞.INF 除-CONJ(SS) 炙.INF 除-CONJ(SS)
ta e+Vkl-a-pgi yu Vke ne-Vra-pga laral
 IRR LV+NEG-FUT-1PL.SRD.DEM 只 蒸.INF 食-FUT-1PL.SRD 狂亂 (VN)
kul-Va-pdae = (23)
 LV-FUT-1PL.SRD.MK

（トプラム・カルといふ茸の皮を）削らず、また（もし）液などを搾り取つたり煮こぼしたりしない場合、そのまま調理して食べた場合、狂亂状態に陥る。

以上に見たやうに、可能性提示の「*ta*」、*ta* は、あくまで、限定的に認めるにとどめる方が良ささうである。この点、千田 (2019) は可能性提示を非現實の一種と考へて、多くの「*ta*」に對して非現實の機能を認めすぎてゐる。

ただ、「一個」を必ずしも表はさず接語の音調を持つといふ不定的な振る舞ひが確認できるものの中に、条件節に出現し、その機能を特定しにくいものがある。それがここで可能性提示の用法としたものである。そして、ドム語において、不定の用法が非現實の用法となんらかのつながりをもつかどうか、引き続き検討する価値はありさうである。ここに見た問題は、可能性

提示の文脈と否定の文脈が重なることがあるといふ問題である。§3 では、非現実の「*ta*」が否定対極表現に端を發する可能性を述べたが、不定の用法が擴張する道筋を辿り非現実の用法へと發達した可能性がある。

5 複合表現による「一つ」

聞き出し (elicitation) 調査で「一」に該当する表現を求めると、眞つ先に教へてくれる表現が *ʌtenan=ʌta* である。しかし、テキストの中で探してみると、用例の数は多くはない。

ʌtenan=ʌta の用法は、*ʌtenan* の用法に近いところがある。まづ、同一の含みを持つ場合がある。次の (70) は (5) と同じテキストに含まれ、(5) と同様、一つの、同一の川に二つの名前がついてゐることを説明する表現である。

- (70) *ʌpeldm=(ʌ)Nule ʌAu=ʌNule ʌi ʌnl ʌtenan=ʌta ʌdu-gwe. ʌdu-m=ʌba ʌkaa*
 [河川名] [河川名] DEM 川 一=INDEF 有-3SG.DEC 有-3SG=ADVRS 名
ʌi ʌsu ʌyo-pge.
 DEM 二 稱-1PL.DEC

(今言つた) このペルディム川とアウ川は一つの川です。けれど、名前は二つ付いてゐます (我々は付けてゐます)。

川の単一性あるいは同一性は (5) では *ʌtenan* で表現されてゐるが、(70) では *ʌtenan=ʌta* で表現されてゐる。

次の (71) は「同時」、「同日」とも理解できるやうな「ひと時」、「一日」が *ʌtenan=ʌta* で表現されてゐる例である。

- (71) *ʌma-m ʌekʰ ʌtenan=ʌta ʌkamn ʌtenan=ʌta ʌta-gwi ʌgaal ʌsu ʌkul*
 母-3SG.POSS 時 一=INDEF 天 一=INDEF 明-3SG.SRD.DEM 兒 二 産.INF
ʌyo-gwi
 慰-3SG.SRD.DEM

母親がひと時に、一日のうちに (日が出てゐるうちに)、子供を二人産んだ (産んであやした) のだが...

次のやうに、*ʌtenan=ʌta* が唯一の含みを持つやうに見える場合がある。

- (72) *ʌbola ʌtop ʌs-na-gi ʌbola ʌi ʌpapal ʌbola ʌi ʌsu ʌtop ʌs-o*
 豚 買 (VN) LV-FUT-2SG.DEM 豚 DEM 女 豚 DEM 二 買 (VN) LV-IMP
ʌdu-gw^e. ʌyal ʌbola=ʌta kul-ʌa-gi ʌtenan=ʌta ʌkul-o ʌdu-gw^e.
 言-3SG.DEC 男 豚=INDEF 飼-FUT-2SG-DEM 一=INDEF 飼-IMP 言-3SG.DEC
 =(65)

豚を買ふときには、豚は雌豚なら二匹買へと言つた。雄豚を飼ふなら一匹 (だけ)飼へと言つた。

ただ、*ʌtenan=ʌta* に唯一の含みを持たせて使ふ時には、次のやうに=*ʌgra* 「～だけ」を後續させるのが普通である。

- (73) *ʌgaal ʌapl ʌteran=ʌta=(ʌ)gra ʌkul ʌyogwe.*
 兒 女兒.3SG.POSS 一=INDEF=だけ 産.INF 慰-3SG.DEC

子供は娘を一人だけ産んだ。

ʌtenan が唯一性の含みを持つて使はれる時、=*ʌgra* 「～だけ」の付いた例が見当たらない。すると、*ʌtenan* は=*ʌgra* に頼らずとも唯一性の表現を十分に構成しうるのに對し、*ʌtenan=ʌta* は唯一性の強い含みを持つてゐない可能性が高い。

次のやうな例における *ʌtenan=ʌta* も、唯一の含みに通じるところがある。

- (74) *ʌmekon ʌi ʌai ʌgua ʌgua ʌta ʌko+ʌk-gw^e. ʌer^e*
 メコン (茸名) DEM 所 出鱈目 出鱈目 IRR 生 +NEG-3SG.DEC 木
ʌdam ʌmel ʌki ʌdu-m=ʌba ʌgua ʌgua ʌta
 ニューギニア・オーク 多 INTENS 有-3SG=ADVRS 出鱈目 出鱈目 IRR
ʌko+ʌk-gw^e. ʌai ʌtenan=ʌta ʌkol-gwa-l ʌi ʌkol-gw^e.
 生 +NEG-3SG.DEC 所 一=INDEF 生-3SG.SRD-LOC DEM 生-3SG.DEC
ʌdam ʌwai ʌdu-gwa ʌai ʌmapn=ʌta ʌi ʌkol-gw^e.
 ニューギニア・オーク 良 有-3SG.SRD 所 根本=LOC DEM 生-3SG.DEC

メコンは出鱈目なところには生えない。ニューギニア・オークの木はたくさんあるが、(どのニューギニア・オークでもよくはなく) 出鱈目には生えない。ある特定の、生えるところに生える。良いニューギニア・オークのあるところの根本に生える。

(74) の表現全體が次の例と酷似することに注意しなければならない。

- (75) *ʋdam^e ʌgua ʌgua ʔta ʔko+ʋk-gwe. ʔta ʌkol-gwa-l*
 ニューギニア・オーク 出鱈目 出鱈目 IRR 生 +NEG-3SG.DEC INDEF 生-3SG.SRD-LOC
ʌai ʌkol-gwe. = (62)
 所 生-3SG.DEC

(ダラダラといふ茸は) ニューギニア・オークに出鱈目に生えるものではない。
どこか/ある、生えるやうな場所に生えるのだ。

(74) では *ʌtenan=ʔta* が、(75) では *=ʔta* が、特定の不定 (a certain) の対象を表現するために使はれてゐる。不定の *=ʔta*、*ʔta* は特定の対象も不特定の対象も指すことがあることを指摘した。それに對し、*ʌtenan=ʔta* は主に特定の対象を指すために使はれるやうである。その點が兩者の違いになる。

もう一つ、注目すべきなのは、中立的な列挙表現に *ʌtenan=ʔta* が不定の *=ʔta* と同列に扱はれてゐる例があるといふことである。

- (76) *ʋgaal ʌi ʌtenan=ʔta ʌkul ʋyo-gwi ʌyal ʋgaal ʌtenan=ʔta ʌkul*
 兒 DEM 一=INDEF 産.INF 慰-3SG.SRD.DEM 男 兒 一=INDEF 産.INF
ʋye-re ʋapal ʋgaal=ʔta ʌkul ʋye-re ʌel-gwa
 慰-CONJ(SS) 女 兒=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS) LV-3SG.SRD

子供を一人産んだが、一人 (目) は男の子を産み、(もう) 一人は女の子を産んだのだが...

(76) では *ʌtenan=ʔta* と不定の *=ʔta* が列挙される項目の修飾部に同様に現はれてゐる。この文はすでに示した次の文と、構造的・内容的に酷似してゐる。

- (77) *ʋgaal ʋsu ʌkul ʋyo-gwi ʔwa-m=ʔta ʌkul ʋye-re*
 兒 二 産.INF 慰-3SG.SRD.DEM 息子-3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS)
ʌapl=ʔta ʌkul ʋye-re ʌel-m ʌdu-gwe. = (63)
 女兒.3SG.POSS=INDEF 産.INF 慰-CONJ(SS) LV-3SG 言-3SG.DEC

子供を二人産んだが、一人 (目) は息子を産み、(もう) 一人は娘を産んだと言ふ。

以上に見たやうに、*ʌtenan=ʔta* は、*ʌtenan* と似て、同一性を表はす文脈や、唯一性を表はす文脈で使はれる。ただし、単一でない少量を表はす場合は見つからず、唯一性の含みは強いとはいへない。また、*ʌtenan=ʔta* は不定の *ʔta* や中立的列挙の一項目を指す不定の *=ʔta* と同様の環境に現はれることがある。ただし、不定の用法で見たやうな、単一でない対象や不特定の対象に使はれた例が見当たらない。つまり、*ʌtenan=ʔta* は、形式に見える通り、*ʌtenan* と *=ʔta* の両方の側面を持ち合はせる、「同一」あるいは「特定かつ不定」の含みを持ちうる「一つ」だといふことが言へる。

さて、 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ の第一の要素である λtenan は下降型の聲調を持つため、後続の $=\text{ʔta}$ が自立語なのか、接語なのか、ピッチの振る舞いだけから特定することはできない。しかし、 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ の第二要素は、不定を表はす $=\text{ʔta}$ 、 ʔta が多く接語で現はれるのと同様、どうやら、接語のやうである。といふのも、數量を主に表はす表現の中に、 $=\text{ʔta}$ を要素として含む複合形式があるからである。次の四項目が見付かつてゐる。

- (78) a. $\text{ʔyokau}=\text{ʔta}$ 「少し」
 b. $\lambda\text{slau}=\text{ʔta}$ 「少し」
 c. $\lambda\text{mapn}=\text{ʔta}$ 「たくさん、ひどく」
 d. $\lambda\text{wena}=\text{ʔta}$ 「たくさん、ひどく、遠く」

(78) のうち、韻律上、接語のパターンを明らかに示してゐるのは (78a) のみである。しかし、形式的な平行性を捉へるならば、(78b-78d) もみな $=\text{ʔta}$ を含む數量表現だと考へるのが適當ではないだらうか。そして、 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ をこのやうなものの一つとして位置づけることには無理がないやうに思はれる。

これらの數量表現は、強調語の置き方に特徴がある。通常の形容詞 (例へば λwai 「良い」) は強調語を後ろに従へる (例へば $\lambda\text{wai} \lambda\text{wone}$ (良 眞) 「とても良い」) のに對し、これらの數量表現を強調する場合には λwone 「とても、眞に」が第一要素の後ろに添へられ、次のやうな構成を取る。

- (79) a. $\text{ʔyokau} \lambda\text{wone}=\text{ʔta}$ 「とても少し」
 b. $\lambda\text{mapn} \lambda\text{wone}=\text{ʔta}$ 「とてもたくさん、とてもひどく」

$\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ もこれらと同じ振る舞いを示す。

- (80) $\lambda\text{tenan} \lambda\text{wone}=\text{ʔta}$ 「たつた一つ」

また、 ʔyokau については $=\text{ʔta}$ を伴はない單獨表現 ʔyokau 「少しだけ」や、反復表現 $\text{ʔyokau} \text{ʔyokau}$ 「少しづつ」をも持つ。 $\lambda\text{tenan}=\text{ʔta}$ に對して、 λtenan 「一つだけ」や、 $\lambda\text{tenan} \lambda\text{tenan}$ 「一つづつ」があるのと形式的・意味的に平行性が認められる。それだけではなく、會話の中で聞いた表現に次のやうな例がある。

- (81) $\lambda\text{kipi} \text{ʔyoko} \lambda\text{d-o}$
 嘘 少 言-SG.IMP

嘘もほどほどにしろ。(嘘をつくのは少しにとどめてくれ。)

ここで、 ʔyoko は ʔyokau の自由變異である。 $\text{ʔyoko}=\text{ʔta} \lambda\text{do}$ 「少し言へ」と言つたらどうなるといふ問ひに、話者は吹き出した。 $=\text{ʔta}$ のつかない ʔyokau は時に否定に、あるいは「無」に

近づく僅少であるのに對し、 $\text{ʔyokau}=\text{ʔta}$ は少しなりとも存在することを主張する表現になるわけである。このコントラストが、 ʔtenan と $\text{ʔtenan}=\text{ʔta}$ にもある程度平行的に見られると言へる。 $\text{ʔtenan}=\text{ʔta}$ は同一性の含みをもちうるが、僅少を表はす用法がなく、唯一性を表はす用法は ʔtenan ほど顯著ではない。

少し似てゐるのが英語の *a few/few*、フランス語の *un peu/peu*、ドイツ語の *ein wenig/wenig* の違ひ (Jespersen 1924: 324) だが、ドム語でこれほど綺麗に對應すると認められるか、といふ點については今後さらなる検討が必要である。ただ、この對立が少量・少数にのみ認められることは、西洋語と一致する。また、多量・多数について英語の *a lot* に對應するやうに $\text{ʔmapn}=\text{ʔta}$ 「たくさん」、 $\text{ʔwena}=\text{ʔta}$ 「たくさん」があることも興味深い。

6 をはりに

既存の電子化テキストには本稿で注目した韻律の情報が不足してゐたため、フィールドノートと録音資料から、電子化せずに眠つてゐたテキストを新たに打ち込みながらデータを示した。本稿にみえる用例の多くが明らかに茸關聯、選舉關聯のテキストから採られてゐることは、作業の對象にしえたデータ量がまだ少ないことを端的に示してゐる。一方で、自然發話の中に類似の表現を集めることが觀察・分析の手續きの有効であるといふ感觸も得ることができた。そのため敢へて分野を限つた作業を續けた。

今後の課題が多く残つてゐる。韻律情報を含むデータの擴充が第一である。なかでも、本稿では非現實の ʔta の韻律的振る舞ひを検討できてゐない。「一」を表はす形式の品詞としての位置付けや、數量詞の意味・内容面でのさらなる検討も必要である。

ドム語には數を表はすことを主たる任務とする語根は三つしかない (cf. Tida 2006: 58)。 ʔtenan 「同一、唯一」と ʔta 「一個」と ʔsu 「二」である。そして、數を主として表はす語は、この三つに複合語の ʔsuta 「三」を加へた四つしかない。その他の數表現については Tida (2006) を参照されたいが、全てある種の複合的な表現であり、一語ではない。限りある數語根のうち二つを「一」のために充てるのは、どこか無駄遣ひのやうにも見える。しかも二つの「一」では飽き足らず $\text{ʔtenan}=\text{ʔta}$ といふ複合形式を創つたり、自立語 ʔta と接語 ʔta との區別をしたりする。そして表現が複數ある以上、使ひ分けが存在する。

泉井 (1978: 190) よると、印歐祖語にも「一」を表はす語根が二つ ($*\text{sem-}$, $*\text{ei-/*ei-no-}$) 指定される。二つの「一」のうち、一つ ($*\text{sem-}$) は「一つにまとめる、集める」、もう一つ ($*\text{ei-/*ei-no-}$) は「いくつかのなかから特に一つを抜き出して示す」意味を持つてゐたといふ。ドム語の ʔtenan と ʔta の意味的な違ひを髣髴させるものがある。

今、ドム語にはトク・ピシンからの借用語が大量に流入してゐる。數表現も例外ではない。すでに固有語による「四」以上の數表現が日常的に使はれることはないし、傳統的な「二」や「三」もすでに危ふいところにさしかかつてゐる。唯一本稿で扱つた「一」は、固有語の諸形式が非常に元氣である。完全に對應するトク・ピシン表現がないからであらう。ドム語の「一」を表はす諸形式は、その意味で極めてドム的な表現世界の一つを示してくれてゐる。

略號

=	接語境界	DEM	指示詞	MK	共有知識
+	結び付きの強い接語境界	DEST	目的地	NEG	否定
1	一人稱	DS	異主語	NSG	非單數
2	二人稱	DU	雙數	PF	句末
3	三人稱	EXPL	説明	PL	複數
ADV	副詞化	FUT	未來	POSS	所有者
ADVRS	逆接	IMP	命令形	RES	結果
AUX	助動詞	INDEF	不定	QUOT	引用
CF	節末	INF	連用形	SG	單數
CONJ	連結	INTENS	強調	SRD	從屬法
COMPL	完結	IRR	非現實	SS	同主語
DEC	平叙	LOC	場所化	VN	述語性名詞
		LV	輕動詞		

謝辭

本稿は JSPS 科研費 17H02333, 18K00533, 19KK0012 の成果の一部を含む。本稿にコメントを下された鈴木博之さん、古本真さんに感謝する。編輯擔當の藤原敬介さんにもお世話になった。

参考文献

- 泉井久之助 (1978) 『印欧語における数の現象』 大修館書店.
 Jespersen, Otto (1924) *The philosophy of grammar*. Unwin Brothers, (reprinted in 1963).
 Tida, Syuntarô (2006) *A Grammar of the Dom Language*. Ph.D. dissertation, Kyoto University.
 千田俊太郎 (2019) 「ドム語の訓話」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 18、1-28.

受理日 2020 年 4 月 15 日